

先天性全盲女性を対象としたブラインドメイクによる意識調査研究**ー化粧援助技術指導者による訓練過程の一事例からー**

○ 日本福祉大学大学院 福祉社会開発研究科 博士課程 大石 華法 (8678)

キーワード: 視覚障害者, 先天性全盲, 化粧

1. 研究目的

本研究は、これまで化粧経験の無い先天性全盲の50歳代女性に、鏡を使用しなくても自分自身でフルメークアップ（以下「化粧」という）ができるブラインドメイク・プログラム（以下「プログラム」という）による化粧が化粧援助技術を指導する者による化粧訓練（以下「レッスン」という）によりできるまでの意識の変化について聞き取りを行い、考察することを目的とする。

注) ここでいう化粧とは、スキンケア、化粧水、乳液、リキッドファンデーション、パウダーファンデーション、マスカラ、ビューラー、口紅、アイシャドウ4色、アイブロー、チークを示す。

2. 研究の視点および方法

2009年度の社会福祉士及び介護福祉士養成の新カリキュラムの教育内容に「化粧」が追加されて、介護現場での「身だしなみ」や「化粧」から得られる効果が期待されている。しかし、現状では化粧をする対象は高齢者や認知症患者とした科目実習は多いが、視覚障害者を対象とした科目実習はまだ行われていない。

2010年に大石が、視覚障害者が自分自身で化粧することができる化粧技法「ブラインドメイク・プログラム」を考案したことで、他者に化粧をしてもらうことから、自分自身で化粧をするに関心を持つようになった。これまで100名程度のプログラム参加者を対象とした調査実施の経験を持っている。このうち先天性全盲は3ケースにとどまり、本研究の調査に協力してくれた対象者は先天性全盲の50代女性1人のみであった。プログラム開始から自分自身で化粧ができた合計20時間（5日×1レッスン/4時間）1レッスン毎に聞き取りを行った。

3. 倫理的配慮

本研究における対象者には、日本社会福祉学会の研究倫理指針に基づいた配慮を行い、本研究内容・方法・目的を十分に説明して承諾を得ている。

4. 研究結果

ブラインドメイク・プログラム参加から下記の合計4回（20時間）の実習を実施した。

【第1回】2014年9月21日:ブラインドメイクの理論の説明後、洗顔、化粧水、乳液、ファンデーションの化粧指導を行った。

長く憧れていた化粧できることに喜びを感じた。目が見えなくても晴眼者の女性と同じように化粧をしたいと思っていたが、見えないので仕方がない事だと諦めていた。1レッスン後には一人でファンデーションが出来るようになったことがとても嬉しい。主人も娘も「綺麗」と言って喜んでくれたことがなにより嬉しい。早くフルメーキャップが自分で出来るようになりたい。次のレッスンを楽しみにしている。

【第2回】2014年11月4日：パウダーファンデーション、ビューラー、マスカラビューラーの化粧指導を行った。

ビューラーの形や使用方法すら知らなかったが、何度か訓練すると出来た。目が見えないので瞼を開けている意味がないと思っていたが、ビューラーとマスカラをすると、目が開いている感覚が分かった。晴眼者の女性と同じことができて嬉しい。

【第3回】2015年2月7日 アイシャドー、アイブロー、チークの化粧指導を行った。

娘と三面鏡を購入した。昔から母が「化粧をする時は鏡に向かってする」との言葉を思い出し、毎朝三面鏡の前で化粧をしている。周囲から「化粧しているの」「綺麗になったね」という声が嬉しい。クリスマスに主人がアイシャドーと口紅をプレゼントしてくれたことでモチベーションが上がり、娘の同行で通った。

【第4回】2015年5月3日 フルメーキャップのおさらいを行った。自分自身で化粧が出来たことが確認できたため、合計4回のレッスンでプログラムを修了した。

自分では一生涯化粧をすることができないと諦めていたことが出来るようになり、夢が叶ってとても嬉しい。夫や娘から「綺麗に化粧している」と言われるようになって嬉しい。主人が以前よりも外出する時に連れて出歩いてくれるようになった。女性としての幸せを感じる。女性に生まれてきて良かったと思えた。他の視覚障害者にも伝えたい。全国で多くの視覚障害者がブラインドメイク・プログラムを受けることができればいいと思う。自分に自信が持てた。三面鏡の前で化粧をすると気持ちが華やぐ。化粧をマスターできたので、次は料理にチャレンジしたい。

5. 考察

以上の調査結果から、次の3つの考察できた。1つは、化粧の色彩や鏡を通して自身の姿を見たことがない先天性全盲の女性であっても、化粧をしたい願望や欲求があること。2つめは、化粧経験のない先天性全盲の女性が、プログラムに沿った4回のレッスン（20時間）で化粧ができたことによるプログラムの有効性。3つめは、対象者の化粧に取り組む前向きな姿勢と家族の協力により、障害があることで「できなかったことが、できた」自信を持つことができ、次の目標を立ててチャレンジする意欲に繋がった。これらの考察から、プログラムは先天性全盲の女性に有用であることが確認できた。

本研究は一事例であるため、対象者を増やして、多様な視点からの調査研究をすることが必要とされる。